

# 富山大学アーカイヴズ・ニュースレター

—富山大学の未来をひらくアーカイヴズ—

ARCHIVES NEWS LETTER

2020.3.27 第7号

## 富山大学アーカイヴズ発足にあたって

アーカイヴズ室長 鈴木 景二

富山大学アーカイヴズは、立川健治先生（名誉教授）により準備と資料収集が開始され、平成 27 年 4 月に設置検討準備室が置かれました。その後、準備室長（現副室長）入江幸二先生と堰室員が、熱意をもって学内・学外に向けて活動を続けてこられました。そして昨平成 31 年 4 月に正式に設置され、日本史を専門とするわたくしが室長に就任致しました。どうかよろしくお願い申し上げます。

さて、去年はちょうど新制大学設立 70 周年にあたり、各大学で記念事業が催され本学でも特別展示を行いました。各学部の所蔵資料を借用して公開するとともに、磯部祐子理事・副学長にお願いして、図書館が所蔵する和本の伝来が、江戸時代以来の教育機関の変遷に対応しているというご研究成果を展示しました。

また、全国大学史資料協議会の全国研究会では、入江副室長が本学の歩みとアーカイヴズの活動を発表し、各大学の方々から注目されました。

これからも、こうした活動とともに資料、情報の蒐集しゅうしゅうを続けてまいります。まだまだ学内・学外に資料が残されているかもしれません。みなさまからの情報のご提供をお待ちしております。

## 蔵書印でたどる富山大学の歩み

富山大学理事・副学長 アーカイヴズ担当 磯部 祐子

書籍をめくるとそこには様々な印が捺おされています。この印は蔵書印といい、その本を誰が所有していたかを表すもので、そこからは書籍の伝来過程が分かるため、組織の変遷も窺うこともできます。つまり、富山大学の蔵書にある印章から、大学の歴史も明らかにすることができるのです。

また、所蔵書は、富山大学が担った各時代の使命と富山大学が持つ伝統の重みを教えてくれます。では、附属図書館に所蔵されている糸綴じの和漢書からその蔵書印を見ていきましょう。



「富山大学蔵書」印

### 富山大学附属図書館所蔵本に見る蔵書印

#### 1：藩校蔵書印

富山県の教育拠点、江戸時代、越中国婦負郡と新川郡の一部に領地を有した富山藩にありました。

富山藩は、加賀国に本拠を定めた前田利常が、長男光高に加賀国金沢を、次男利次に越中国婦負郡などを与え、三男利治には加賀国江沼郡などを与えて分家させ独立させたことに始まります。

越中国についてみれば、全石高が約六十万石余で、前田家の最も重要な領地であり、そのうちの砺波郡や射水郡、新川郡は前田宗家領有としていました。そのため、富山藩が置かれた富山市に富山県の全ての中心があったといえます。

しかし、富山藩は、教育機関である藩校広徳館を宗藩加賀藩より早く設け、組織だった教育拠点を持っていたことから、現在の富山県における公教育の原点を広徳館に置くこともできます。ですが、今日、藩校が設けられた江戸安永期以来の蔵書は、明治元年（慶応 4 年）九月の火災で焼失したためか、藩校広徳館印のある書籍は現存しません。ただ、明治元年以後に再び収められた蔵書や藩校で出版された書物は残っていて、かつての広徳館蔵書のおもかげを留めています。

#### 2：明治の蔵書印

##### 1)「富山学校蔵書」印

大政奉還、そして明治維新により江戸幕府がなくなり、独自の政治体制である藩は、明治政府下の行政単位にな



りました。そのため、旧藩それぞれが設けた藩校は、全て藩知事が仕える明治政府下の学校となりました。この体制変革の中で、火災で蔵書や校舎を失った広徳館は仮の校舎を設け蔵書を再び備えていきますが、学校は藩（の）学校と呼ばれることになり、「広徳館」という固有の学校名を廃止します。そのため再び学校奉行などの努力で蒐められた書籍は、学校蔵書と呼ばれました。この時に使われた可能性のある蔵書印は「学校蔵書」印です。後にこの印のある蔵書は、新川県師範学校に伝えられていることから、富山大学の源泉は「学校」に、附属図書館蔵書の源泉は「学校蔵書」に求めてもよいといえます。

明治4年廃藩置県が実施されると、明治政府治下の富山藩は消滅し、前田家と関係の薄い新川県が魚津に誕生しました。当時、明治政府は東京書籍館建設のため、旧藩の藩校の蔵書目録と書籍を差し出すように命じます。富山藩も新県の名で蔵書を差し出し、他地域の学校と区別するために「富山学校蔵書」印（写真①）を捺して新川県経由で明治政府に差し出したと思われます。

「富山学校蔵書」印の本は、やがて、主なものは師範学校蔵書となり、新制大学制度の下で、師範学校から富山大学教育学部に受け継がれました。今日では、富山大学や富山県立図書館などに所蔵されています。

しかし、廃藩後、富山の師範学校はかなりの紆余曲折を経ます。それは蔵書印からも見るができます。

明治5年旧富山藩が設立した諸学校が廃止され、翌明治6年、新川県庁が再び富山市に戻ると、現在の富山市北新町に新川県講習所が設けられます。この時から明治8年に、教員養成を目的として新川県講習所が新川県師範学校と改称されるまでの間に、使用された蔵書印が以下の講習所関連印です。



①「富山学校蔵書」印

## 2) 講習所関連印

東京への上納を免れた「富山学校蔵書」印の書籍が、新川県講習所の蔵書になったと思われます。その際に使用されたと思われる蔵書印が、「第六大学区／新川県講習所」「第六大学区／新川県・学校係・講習所」（写真②）「新川県学校課」「新川県」印です。



②「新川県・学校係・講習所」印

## 3) 師範学校・富山中学校・富山高等学校に関する印

明治8年新川県師範学校と改称されると、「第六大学区／新川県師範学校」印の蔵書印が捺されます。ところが、明治9年4月に新川県が石川県に編入されると、これに応じて、師範学校も石川県に組み込まれ「石川県師範学校」印（写真③）が用いられますが、後に金沢の師範と区別して富山支校では、「石川県富山師範学校」印（写真④）が用いられます。



③「石川県師範学校」印



④「石川県富山師範学校」印

しかし、翌明治10年2月、支校の名称は廃されて、第二師範学校となり、「石川県第二師範学校」印（写真⑤）のほか女子師範には「石川県第貳女子師範学校」印（写真⑥）の蔵書印が捺されました。



⑤「石川県第二師範学校」印



⑥「石川県第貳女子師範学校」印

それから5ヶ月後の7月、両師範学校は小学師範学校となったため、石川県第二小学校師範学校・第二小学女子師範学校と改称され、明治13年8月には石川県富山小学校師範学校、石川県富山女子小学師範学校と改められます。その時、「石川県富山小学校師範学校」印が用いられました。



⑦「富山縣師範学校」印



⑧「富山縣富山女子師範学校」印

明治16年7月、石川県から分離する形で富山県が再び設置されると、師範学校も、富山県を冠するようになります。

明治17年、男女両師範学校が合併されて、男子と女子が区別された学部となり、蔵書印は、それぞれ「富山縣師範学校」印（写真⑦）、「富山縣富山女子師範学校印」（写真⑧）が用いられました。



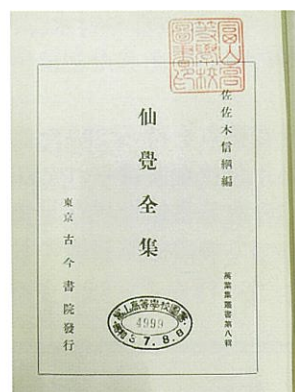
⑨「富山縣尋常師範学校」印



⑩「富山縣尋常師範学校」印

翌明治18年には、富山市総曲輪に富山県中学校が設置され、明治34年に県立富山中学校となりますが、その時は、「富山中学校」印（写真⑨）が捺されたようです。一方、師範学校は、明治19年に尋常師範学校に改称されると、蔵書印も「富山縣尋常師範学校」印（写真⑩）となります。その後、幾多の変遷を経て、師範学校は、今日の富山大学人間発達科学部になります。

大正12年には、県立の富山高等学校の設置が認可され、翌大正13年に開学することになり、蔵書印もこれに応じて「富山高等学校図書印」印（方印）、「富山高等学校図書」印（楕円印日付入）（写真⑪）が用いられます。この旧制富山高等学校は、後に、富山大学文理学部となり、現在の富山大学人文学部、理学部に改組されます。



⑪「富山高等学校図書印」印(方印)、  
「富山高等学校図書」印(楕円印日付入)



### 3：薬学部関連の蔵書印

明治26年に、富山市梅沢町に私立の共立富山薬学校が設立され、本学薬学部の幕が開かれます。その後、富山市立富山薬学校（明治30年）、富山市立富山薬業学校（明治33年）、富山縣立薬業学校（明治40年）と名称が次々と変わり、明治42年には、専門学校令により富山縣立薬学専門学校として設立が認可され、翌明治43年に開学します。大正9年に官立富山薬学専門学校となり、昭和24年に国立学校設置法により国立富山大学に統合包括され、富山大学薬学部となります。

今日残る蔵書印は、「富山縣立薬学専門学校圖書」「富山薬学専門学校圖書之印」（写真⑫）で、多くは西洋から輸入した洋書に捺されています。



⑫「富山縣立薬学専門学校圖書」「富山薬学専門学校圖書之印」印

### 4：経済学部関連の蔵書印

大正13年9月高岡に日本海沿岸唯一の官立商業高等学校として高岡高等商業学校が設置され、本科の他、東亜科・臨時補修科が置かれました。昭和19年3月に「高岡経済専門学校」と改称し、同年4月に「高岡工業専門学校」に転換され、昭和24年5月設置の「富山大学文理学部経済学科」によって事実上復活し、昭和28年に富山大学経済学部となります。開学時に使用されたのが「高岡高等商業学校圖書課印」印（写真⑬）です。当時の書籍の中には、洋書と中国東北地方の地方志があり、そこから高岡高等商業学校の使命に課された一端を垣間見ることができます。



⑬「高岡高等商業学校圖書課印」印

### 5：他の蔵書印及びその他の印

その他にも、幾つかの蔵書印があり、富山大学の歴史を紐解くヒントが潜んでいると思われます。

#### 1)「明治九年調査印」印（写真⑭）

この印は、蔵書印ではありませんが、蔵書印と深い関係にあります。明治9年に新川県が石川に編入された際に、師範学校旧蔵書の点検を行った確認の印で、おそらく蔵書目録が公文書として存在していたことを示す名残であると思われます。



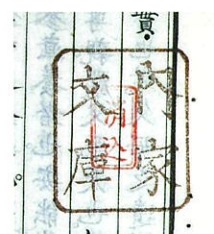
⑭「明治九年調査印」印

#### 2) 個人蔵書印いろいろ

また、個人の蔵書印と思われるものもいくつかあります。

##### ①「内家文庫」印（写真⑮）

「内家文庫」は、富山藩10代藩主前田利保（1800 - 1859）に伝わった経緯がうかがえる書籍に見える印です。「内家」の意味は不明ですが、富山前田家内の文庫という意味であると思われます。捺印箇所から見ると、次項に述べる「萬香文庫」印の後ろに捺したようにも見えます。

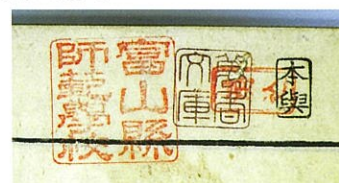


⑮「内家文庫」印

明治2年、富山藩には、内家知事という役職がありましたので、内家とは富山前田家のことで、内家文庫は富山前田家の個人文庫と見た方がよいと思われます。

##### ②「萬香文庫」印（写真⑯）

「萬香亭」とは、前田利保の号です。その著述は、萬香という用紙を用いていることなどから、利保個人の蔵書印であることが分かります。



⑯「萬香文庫」印

##### ③「越中富山」印（写真⑰）

「富山蔵書」と相応する印文で、江戸に相對するものです。確証はないものの富山侯蔵書印と思われます。



⑰「越中富山」印

##### ④「芳尾蔵書」印（写真⑱）「芳尾」印

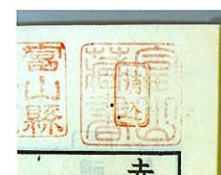
富山藩士に「芳尾」氏がいますが、身分が低いので蔵書家ではないように見えます。日枝神社の神職は、文字は異なる「吉尾」ではあるものの、この印は国学書に多いことから、神職の吉尾氏の可能性もあります。



⑱「芳尾蔵書」印

##### ⑤「富山蔵書」印（写真⑲）

江戸の蔵書に対する国元の印章のことであると思われます。富山侯蔵書印とも思われますが、確証はありません。



⑲「富山蔵書」印

##### ⑥「敬斎所蔵」印（写真⑳）

「敬斎印」と「聲持」の墨書が併記してあることから、「敬斎」は、富山第12代藩主の利聲（1835 - 1904 第12代藩主）書斎名に由来するのではないかと考えられます。敬斎は、朱熹の著書『敬斎箴』から取った名称であるとされます。



⑳「敬斎所蔵」印



「敬斎所蔵」印の書籍は、前田<sup>としあつ</sup>利同（1856 - 1921）に伝えられた書籍に多く見られます。利同は越中富山藩の第13代（最後）の藩主であり、後の伯爵ですが、先代藩主の書籍を受け継いだとみていいでしょう。

「敬斎印」は、富山大学に収められた「富山学校蔵書」にもみられますし、富山県立図書館に寄贈された前田利同蔵書にも捺されています。

- 参考：・『葉の都富山の漢籍と漢学藩校広徳館とその蔵書』（磯部彰 2020年刊行予定）  
・『富山大学経済学部五十年史』（富山大学経済学部 越嶺会発行 昭和53年刊）  
・『富山県教育史上・下』（富山県教育史編集委員会編 1971年刊）

文：磯部祐子（富山大学理事） 写真：富山大学 附属図書館、鈴木景二

## 全国大学史資料協議会・全国研究会での報告について

アーカイヴズ副室長 入江 幸二

2019年10月16～18日、立教大学において「全国大学史資料協議会・全国研究会」が開催されました。2日目の研究会は「新制大学発足をめぐる各大学の動向－その資料と活用－②」というテーマのもと、まず同志社大学・日本女子大学の報告が行われました。最後に「新制富山大学の発足をめぐって」と題して、筆者が地方国立大学の事例を報告しました。以下はその要旨です。

\* \* \*

富山大学は1949（昭和24）年5月に新制大学として発足しましたが、多くの前身校を持っています。またそれゆえにキャンパスが富山県内の各所に点在することになりました。

前身校のうちもっとも古いのは、1873（明治6）年、富山市北新町の地に生まれた師範学校（設立当初は新川県講習所）で、のちに男子部が西田地方町、女子部が堀川町へと移り、戦後になって五福へ移転するとともに教育学部（現人間発達科学部）となりました。次いで古いのが1893（明治26）年に梅沢町に生まれた共立富山薬学校で、のち官立に移管され奥田の地へと移ります（現薬学部）。大正時代になると、廻船業者馬場はるの多大な寄付をうけて、旧制の富山高等学校が蓮町に設立され（1923／大正12年）、現在の人文学部と理学部の母体となります。またヘルン文庫もこのときに設置されています。

1924（大正13）年には、実業界の中核となる人材を育成するため、産業が盛んだった高岡市に高岡高等商業学校が設立されました（現経済学部）。しかし戦時中の国策によって高岡工業専門学校へと転換を余儀なくされ、戦後になって工学部へと生まれ変わります。

第二次大戦後の1947（昭和22）年、県内で新制大学を設置しようとする動きが複数あらわれ、曲折を経て教育学部（五福）・薬学部（奥田）・文理学部（蓮町）・工学部（高岡）からなる総合大学案へと落ち着きました。なおこの時期、大学組織や講義科目などの原案をまとめた「富山大学設置に関する調書」が作成されており、当時の議論を考える手掛かりとなりうる資料であることを指摘しました。

ただ、新制富山大学の設置にあたって、GHQのジョンソン氏からキャンパスを集中させるよう勧告を受けました。実際には4か所に分散した形で大学が発足しますが、「五福集中計画の最初の主張者はジョンソン氏であった」（『富山大学十五年史』）とも評されるように、この一件以後キャンパス集中は本学のいわば呪縛となります。さらに1953（昭和28）年に経済学部が文理学部から独立しますが、その際に同学部をどこに置くかをめぐって富山市と高岡市に対立も生じています。最終的に、1962（昭和37）年に文理学部、2年後に薬学部、1985（昭和60）年に工学部がそれぞれ五福に移転し、ようやくキャンパス集中が実現しました。

その一方、1975（昭和50）年に富山医科薬科大学が設置され、薬学部が富山大学を離れて杉谷へと移ります。また工学部が五福へ移転したことに伴い、1983（昭和58）年には高岡短期大学が開校しました。そして2005（平成17）年、3つの国立大学が統合したことにより、キャンパスはふたたび分散。文部科学省からの意見もふまえ、現在は3キャンパスの教養教育を五福に一元化してシャトルバスによる学生移送を行っています。

### ●お願い

富山大学（富山師範学校、富山女子師範学校、富山青年師範学校、富山薬学専門学校、旧制富山高校、高岡高等商業専門学校、高岡工業専門学校、旧富山大学、富山医科薬科大学、高岡短期大学、富山大学経営短期大学部）に関する様々な資料を蒐集することに向けて準備を進めています。ご寄贈もしくは貸与いただけるような富山大学の歴史に関する資料がございましたら、アーカイヴズ事務室（Tel. 076-445-6179）までご連絡いただければ幸いです。